(2) 他の節足動物

1) ワラジムシ類（甲殻類ワラジムシ目）

① ワラジムシ（ワラジムシ科）

ア　対象種

ワラジムシ

イ　生息情報

全集落

ウ　採録した呼び名

・　形　状　　ゾーリムシ

・　標準和名　　ワラジムシ

エ　生息及び呼び名の状況

人家の庭にある石や落葉の下などの影となった湿気の多い場所でよく見かけられる生き物であり、現在も郡内全集落に生息する。

生息場所や大きさ、形状ともダンゴムシによく似るが、体色が少し薄く、触れても丸くならない。

本種の呼び名としては、「ゾーリムシ」と「ワラジムシ」の計２種を採録した。

郡内のほぼ全域で「ゾーリムシ」と呼ばれたほか、関町地区や椿地区の一部で「ワラジムシ」がみられた。

オ　その他

本種の動きに関して次の伝承を採録した。

・「ゾーリムシにねぶられると痣ができる」

② ダンゴムシ（オカダンゴムシ科）

ア　対象種

　　オカダンゴムシ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

- 丸くなること　　オコロ、コロ、コロコロムシ、コロムシ、ゴロムシ
- 一般的な和名　　ダンゴムシ
- その他　　テンマル

エ　生息及び呼び名の状況

　人家の庭にある石や落葉の下などの影となる湿気の多い場所でよく見かけられ、触れたりすると体全体を丸くする生き物であり、現在も郡内全集落に生息する。

　本種の呼び名としては、「ダンゴムシ」や「コロムシ」をはじめ計７種を採録した。

　郡内全域で一般的な和名である「ダンゴムシ」と呼ばれたほか、外的な刺激ですぐに丸くなることからの「コロ」、「コロムシ」等が郡内のほぼ全域で多くみられた。「コロムシ」等はとりわけ当時の女性高齢者が使っていたという話とともに採録し、一般的な和名である「ダンゴムシ」が広まる以前から地域で使われていた呼び名と考えられる。

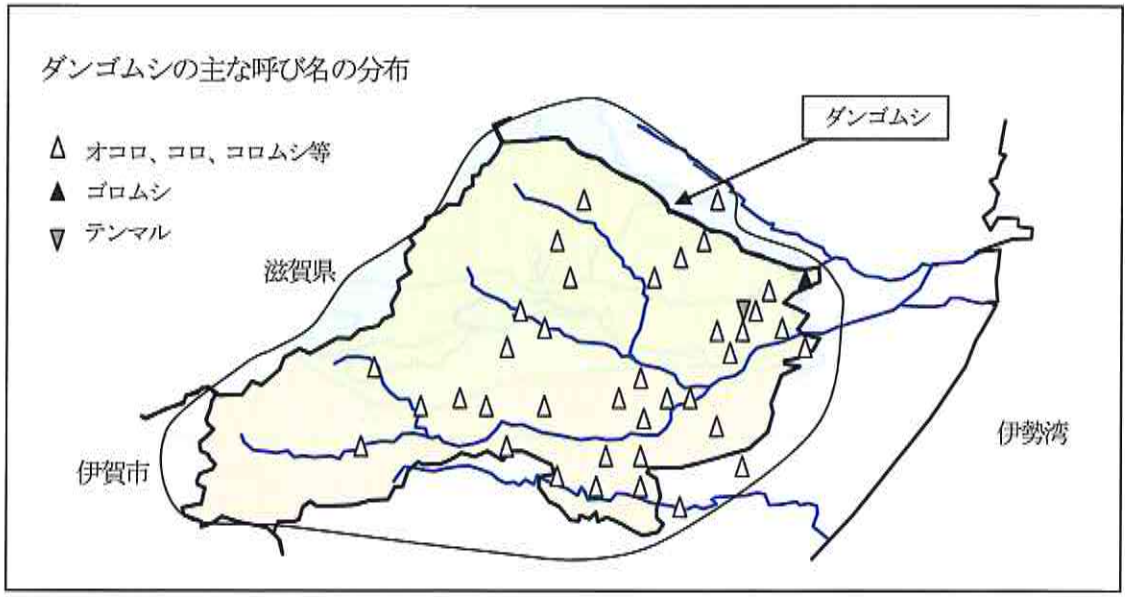
　そのほか、四日市市南小松町で「ゴロムシ」、鈴鹿市上田町で「テンマル」がみられた。

オ　その他

　身近な所にいる本種ではあるが、元々、日本に生息せず明治時代にヨーロッパから積み荷にまぎれてきた帰化動物であろうとされるのに対し、日本在来種として砂浜にハマダンゴムシ、森林内にコシビロダンゴムシが生息する。

　また、本種の出現に関して次の伝承を採録した。

- 「ダンゴムシが（たくさん）出てくると雨（が近い）」



2) クモ類（鋏角類クモ目）

① クモ（総称）

ア　対象種

コガネグモ、オニグモ等クモ類

イ　採録した呼び名

- 総称（一般的な和名）　　クモ、グモ
- 出現時間帯から　　朝：アサグモ、アサノクモ、夕・夜：ユーグモ、ヨイグモ、ヨイノクモ、ヨグモ、ヨルグモ
- 巣（又は構成する糸）　　エンバ、エンバリ、ヘンバ、ヘンバリ

ウ　生息及び呼び名の状況

尾部から出す糸により空中等に網目状の罠を張り、飛来した昆虫等を捕えることで目立つ生き物であり、現在も郡内全集落に生息する。

本類総称としては、「クモ」と「グモ」の計2種を採録した。

郡内全域で一般的な和名である「クモ」を採録したが、鈴鹿川流域以北では当時主に「グモ」と濁って呼ばれたようである。

また、尾部から出す糸で天井から降りてくる場合など人前に姿を現す時間帯からの呼び名として朝には「アサグモ」と「アサノクモ」の計2種、夕方や夜には「ユーグモ」や「ヨグモ」をはじめ計5種を採録するとともに、験の良し悪しと関連させた伝承が全域でみられた。

一方、クモの巣（糸）については、「ヘンバリ」や「エンバリ」をはじめ計4種を採録した。

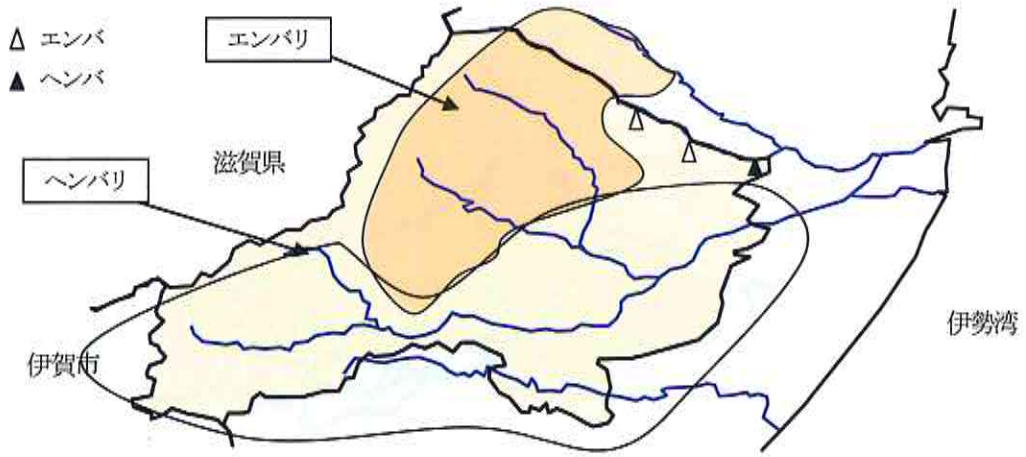
鈴鹿川本流域から郡南部にかけての広い地域で「ヘンバリ」と呼ばれたほか、郡北部を中心に「エンバリ」と呼ばれ、北東部の一部に「エンバ」や「ヘンバ」がみられた。

エ　その他

野登山の頂上近くで、朝日の中、非常に多くの蜘蛛が糸を出しながら、風に糸をたなびかせ飛んで行くのを見たという話や、竹を切り丸くし長い竹棒の先にさし、丸い部分に大きな蜘蛛の巣を幾重にも巻き付け、セミをそこに貼り付けて捕ったという巣（糸）の利用方法についての話のほか、次のような伝承を全域で採録した。

- 「ヨグモはぎざが悪い、アサグモはぎさが良い」
- 「アサグモはほところへ3回入れる真似をするとその日は良いことがある」
- 「ヨイグモ、親と思ても殺せ。アサグモ、かたきと思てもほところへ入れよ」

クモの巣（糸）の主たる呼び名の分布



② アシダカグモ（アシダカグモ科）

ア　対象種

　　アシダカグモ

イ　生息情報

　　ほぼ全集落

ウ　採録した呼び名

- 形　状　　アシナガグモ、ヒラグモ
- 大型であること　　オーグモ、オバケグモ、ヤマグモ、ヤマソ、ヤマソグモ
- 生息場所　　イエグモ、ヤグモ
- ハシリグモとの混称　　ミズグモ
- その他　　オーゴングモ、ガボジ、ガボンジ、ガモンジ、センゾノクモ

エ　生息及び呼び名の状況

糸の網を張らず、人家内の薄暗い場所にいて部屋の隅などを素早く移動する足の長い大型で外来のクモである。ゴキブリ等の害虫を捕食する益虫、神様の使い等とされ良く認識される集落がある一方、家の中にいて大型であることから忌避されたりした生き物でもある。現在は郡内全集落に生息するが、山辺の集落を中心に少なくない人から「昔はいなかった」という話があったことから、当時の生息状況としてははっきりとしない点が残る。

本種の呼び名としては、「イエグモ」や「ヤマソグモ」をはじめ計15種を採録した。

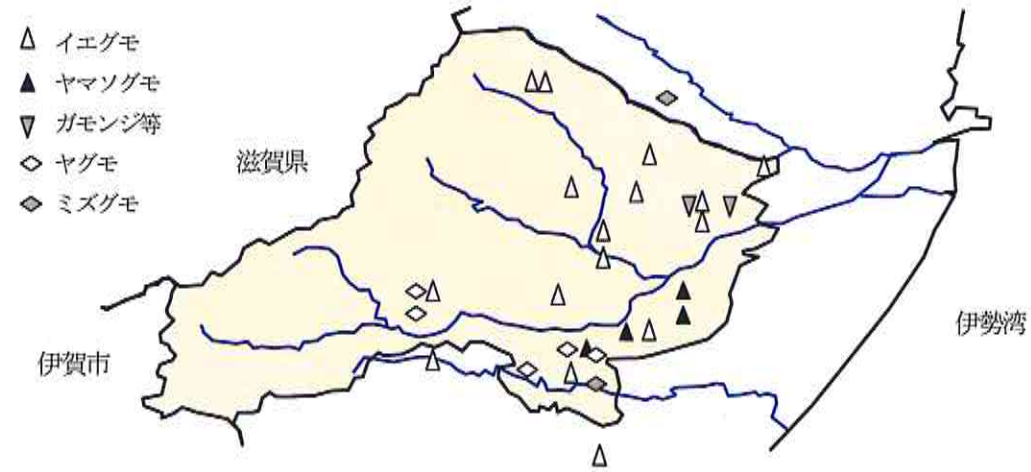
家屋内で見かけられ存在感のある最も大型のクモであるが、当時以前の生息・認識状況を反映してか、はっきりとした固有名としての呼び名は少なかった。採録集落数としては限られたが広域で「イエグモ」を採録したほか、郡南部の一部の集落で「ヤグモ」がみられ、地域的には国府地区で「ヤマソグモ」、石薬師地区で「ガモンジ」等と呼ばれた。

また、水辺に生息するハシリグモ類と似た姿であることから集落によっては「ミズグモ」と呼ばれたほか、大型であることから「オーグモ」、脚が長いことから「アシナガグモ」等とも呼ばれる場合もみられたが本種固有の呼び名として積極的に使われたものではなかった。

オ　その他

「神さん、仏さんの使い」や、盆の時期に出てくると「先祖のクモが入ってきた」と言い殺さないように言われたという話があった一方、忌避された生き物であることから「悪いことするとガボ（ン）ジが出てくるぞ」と言って子どものしつけに使ったという話がみられた。

アシダカグモの主な呼び名の分布



③ コガネグモ（コガネグモ科）

ア　対象種

　　コガネグモ、ナガコガネグモ、ジョロウグモ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

- 戦うこと　　ケンカグモ、チンダイグモ、ヘータイグモ
- 尾部の模様　　カミナリグモ、シマグモ、トラグモ
- 形状（脚が長いこと）　　アシナガグモ
- 大型であること　　トノサマグモ、トノサングモ

コガネグモ

ジョロウグモ

エ　生息及び呼び名の状況

　里山の木立等に大きな巣をかけ、腹部の縞模様が目立つ大型のクモである。現在も郡内全集落に生息するようであるが、身近によく目にするジョロウグモに比べ本種を見る機会は少なく、高齢者からは近年は見なくなったという話もみられた。

　対象種としてはコガネグモ類のほか、集落や人によっては尾部の模様が似たジョロウグモを含む場合もあるようで、どこまでの区別があったのかははっきりとしない。

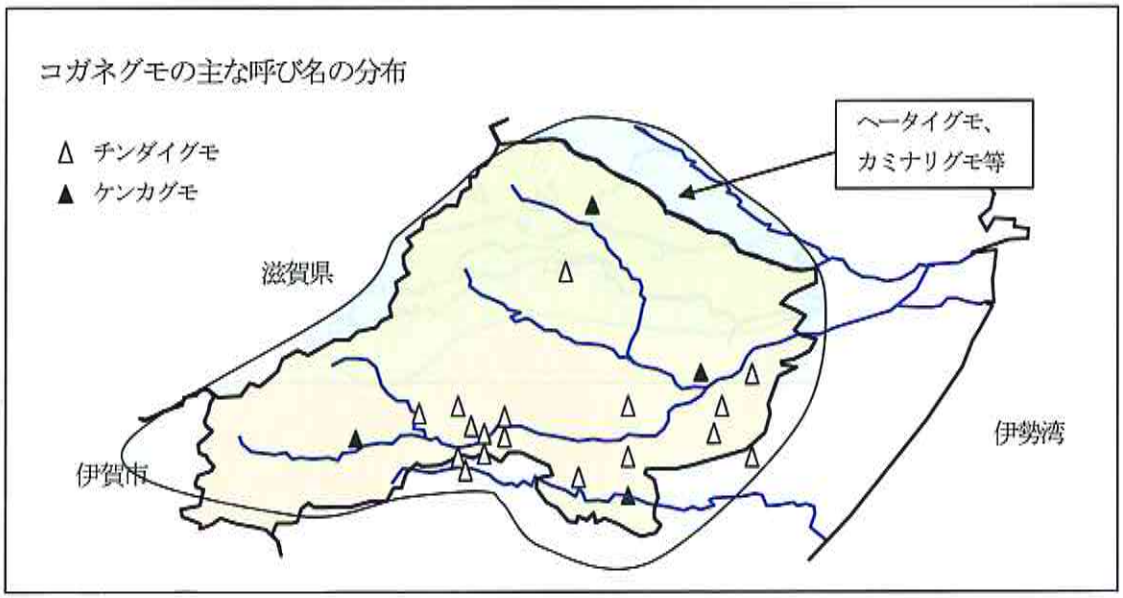
　本種（類）の呼び名としては、「カミナリグモ」や「ヘータイグモ」をはじめ計９種を採録した。

　大型で黄色い縞模様があり目立つクモであり、郡内全域で「カミナリグモ」、また広域で「トノサマグモ」と呼ばれたほか、一部の集落で「シマグモ」、「トラグモ」がみられた。

　また、同種を一緒にすると戦いをすることから郡内全域で「ヘータイグモ」とも呼ばれたほか、関町や神辺地区を中心に鈴鹿川沿いの集落で「チンダイグモ」、一部の集落で「ケンカグモ」がみられた。

オ　その他

　本種（類）による大きな巣は、オニグモ等の巣とともに長い竹竿の先に取り付けた円形部分に幾重にも巻き付けられ、セミ捕りに利用されたという。



④ オニグモ（コガネグモ科）

ア　対象種

　　オニグモ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　形　状　　ダンゴグモ

・　標準和名　　オニグモ

エ　生息及び呼び名の状況

　人家近くの木立等で大きな巣をかけ、腹部が比較的丸く茶色い大型のクモで、当時は郡内全集落に生息した。現在も郡内全集落に生息するものとみられるが、近年は身近な所で本種の大きな巣を見かけることが少ないようである。

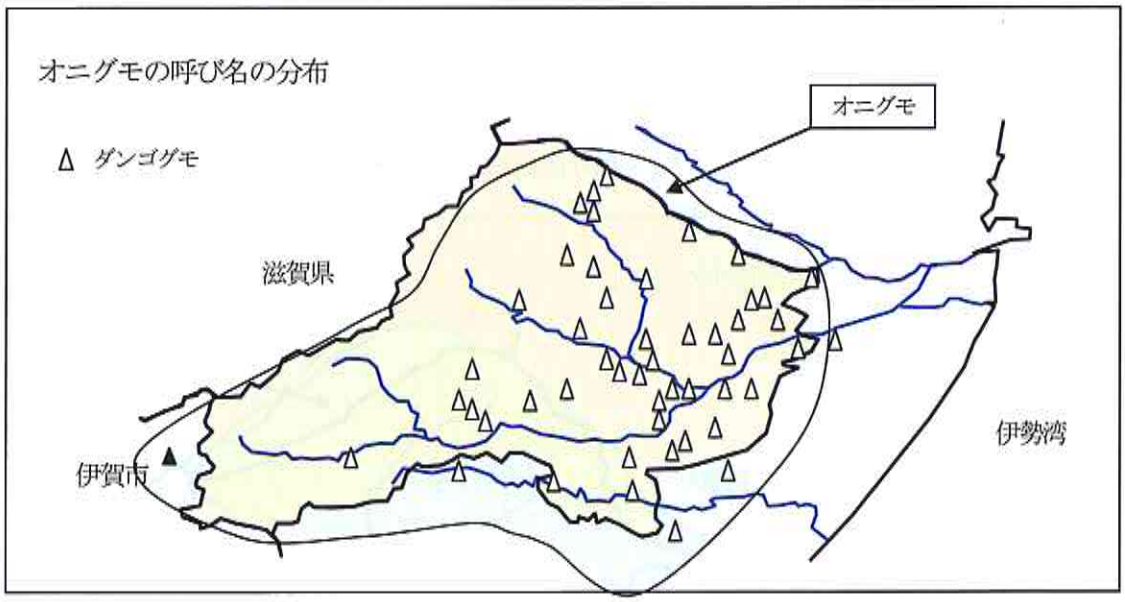
　本種の呼び名としては、「オニグモ」と「ダンゴグモ」の計２種を採録した。

　当時も郡内全域で標準和名である「オニグモ」と呼ばれたほか、郡西部の坂下地区を除くほぼ全域で「ダンゴグモ」がみられ、腹部が団子状に大きい丸い形状からそのように呼ばれたようである。

　なお、不明種として整理した「クマグモ」も大型種であるようであり本種である可能性もある。

オ　その他

　コガネグモ等とともに粘着力の強い大きな巣をかけることから、長い竹竿の先に取り付けた円形部分にその巣が幾重にも巻き付けられ、セミ捕りに利用されたという。



⑤ ジグモ（ジグモ科）

ア　対象種

　　ジグモ

イ　生息情報

　　全集落

ウ　採録した呼び名

・　地中にいること　　アナグモ、エンマグモ、ツチグモ

・　腹を切ること　　サムライ、サムライグモ、サムライサン、ハラキリ、ハラキリグモ

・　袋の中にいること　　フクログモ

・　その他　　カミナリサン、スクモ、チンチンボケ

エ　生息及び呼び名の状況

生け垣の木の根元などで地中に伸びた細長い袋状の巣を作りその中にいるクモであり、現在も郡内全集落に生息する。

本種の呼び名としては、「ツチグモ」や「サムライグモ」をはじめ計 12 種を採録した。

郡内では主に 3 種の呼び名がみられ、それらが地域的に一定のまとまりを示しながらも入り混じるように分布した。

郡北東部を中心に、本種を狭い所に一緒にすると自ら腹部を切ることから「サムライグモ」や「ハラキリグモ」と呼ばれたほか、郡中南部を中心に「ツチグモ」が多くみられた。

また、土中にいることから久間田地域では「エンマグモ」と呼ばれたほか、一部の集落で「チンチンボケ」や「カミナリサン」がみられた。

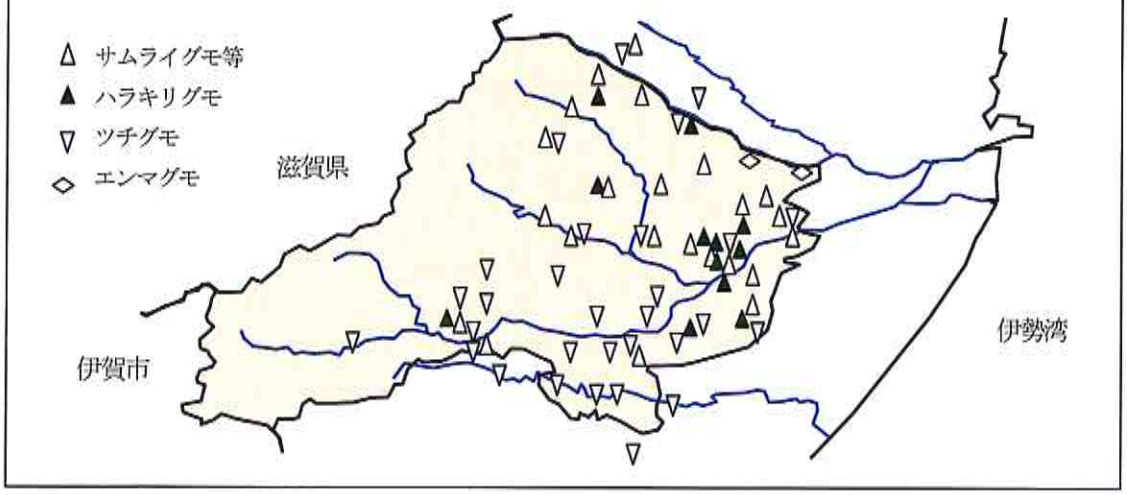
オ　その他

本種はウグイスや釣りの餌に使われたほか、数匹をいっしょにして自身の腹を切るのを見て遊んだという話がみられた。また、「カミナリさん、出やれ」、「さむらい、出やんと家焼くぞ」等と言いながら袋ごとをそっと引き上げたという話とともに、次の捕獲方法を採録した。

・　袋の入り口をかすかに触って振動を与え、クモが袋を上がってきたところを袋の地面付近を押さえ、逃げ場をなくし取った。

・　サムライグモ釣り：ラッキョの枝を軸にして、その先に鼻くそをつけジグモの袋の中に入れる。しばらくすると軸が揺れ、さっと上げると釣れてくる。失敗すると二度と釣れない。

ジグモの主な呼び名の分布



⑥ その他のクモ類

a) 家屋の日陰部分にいる細いクモ（イエユウレイグモ（ユウレイグモ科））

ア　対象種

イエユウレイグモ

イ　採録した呼び名

・　形状（細長い脚）　　アシナガグモ、ハリガネグモ

ウ　呼び名の状況

目立つ生き物でないことから個別に調査対象としなかったが、その他のクモ類としての聴き取りで、家屋の日陰等で見かけられる細いクモの呼び名として「アシナガグモ」と「ハリガネグモ」の計２種を採録した。

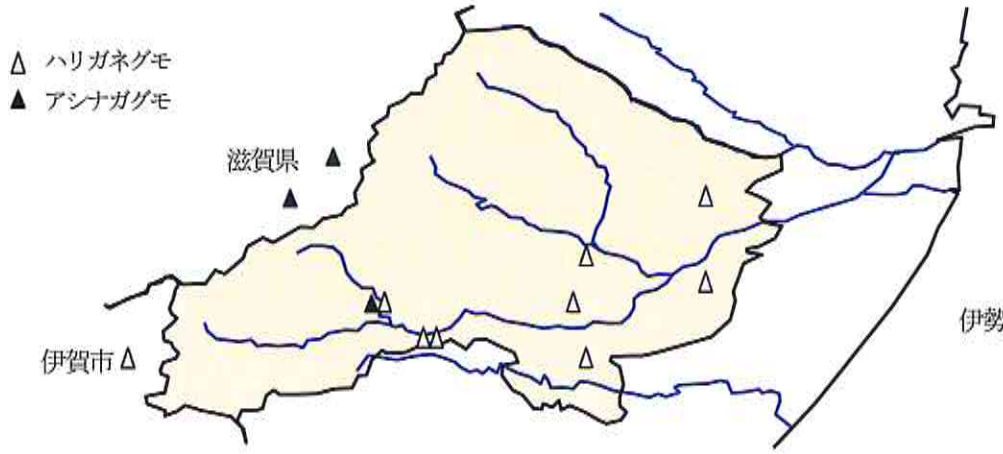
対象種としてはイエユウレイグモがあげられる。

農小屋の物入れの隅等で見かけられ、ゆっくりとした動きで体とともに脚が細長く脚が取れやすいクモである。

「ハリガネグモ」は郡内では一般的な呼び名ではなかったようであるが、関町古厩をはじめ数集落でみられたことから広域で使われた可能性があるほか、関町市瀬で「アシナガグモ」とも呼ばれた。

なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町では「アシナガグモ」を採録し、関町市瀬と峠を挟んで関係がみられた。

イエユウレイグモの呼び名の分布



b) 水面を移動するクモ（ハシリグモ類（キシダグモ科））

ア　対象種

イオウイロハシリグモ、スジブトハシリグモ

イ　採録した呼び名

・　形状（長い脚）　　アシナガグモ

・　生息場所　　ミズグモ

ウ　呼び名の状況

日常生活の場であまり目にする生き物でないことから個別に調査対象としなかったが、その他のクモ類としての聴き取りで、小川の水面を移動するクモの呼び名として「アシナガグモ」と「ミズグモ」の計2種を採録した。

スジブトハシリグモ

対象種としてはイオウイロハシリグモとスジブトハシリグモがあげられる。

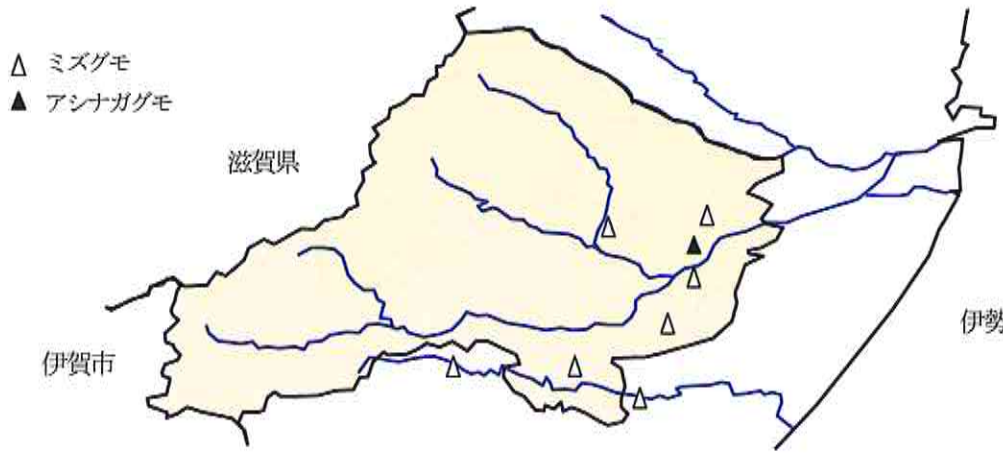
岸に草の多い小川に入ると時折、水面上を素早く移動する姿で見かけられるクモ類である。

生息場所からの「ミズグモ」は郡内では一般的な呼び名ではなかったようであるが、川崎町をはじめ数集落でみられたことから広域で使われた可能性がある。

そのほか、一部の集落で形状から「アシナガグモ」と呼ばれた。

なお、両呼び名とも、家の中で見かけられ姿がよく似たアシダカグモの呼び名となっている集落が一部にみられた。

ハシリグモ類の呼び名の分布



c）小型で尾部が球形のクモ（オオヒメグモ（ヒメグモ科））

ア　対象種

オオヒメグモ

イ　採録した呼び名

・　福が来るという謂れ等　　フクグモ

ウ　呼び名の状況

小型で目立つ生き物でないことから個別に調査対象としなかったが、その他のクモ類としての聴き取りで、人家内外で見かけられ小型で尾部が球形をしたクモの呼び名として「フクグモ」の１種を採録した。

対象種としてはオオヒメグモがあげられる。

「フクグモ」は郡内では一般的な呼び名ではなかったようであるが、亀山市中心街をはじめ数集落でみられたことから広域で使われた可能性がある。

なお、呼び名を採録した四日市市鹿間町・鈴鹿市下大久保町では、「福を持ってくるクモ」として喜ばれる存在であったという。

d）不明種

ア　採録した呼び名

・　形状（長い脚）　　アシナガ、アシナガグモ

・　大型であること　　クマグモ

イ　呼び名の状況

その他のクモ類としての聴き取りで、種別不明のクモとして「アシナガ」と「アシナガグモ」、「クマグモ」の計３種を採録した。

「アシナガ」を含め「アシナガグモ」は郡内では一般的な呼び名であり、アシダカグモやユウレイグモ類を含め特定種ではなく屋内外にいる脚が長いクモ類が対象とされたようであり、種別ははっきりとしない。なお、隣接地域として調査を行った甲賀市土山町ではイエユウレイグモの呼び名とされていた。

「クマグモ」は大型種のクモのようであるが、種別ははっきりとしなかった。

そのほか、関町福徳では、壁についた小型のクモとして「ベタグモ」を採録した。